

寺田寅彦

病院の夜明けの物音



病院の夜明けの物音

朝早く目がさめるともうなかなかな二度とは寝つかれない。この病院の夜はあまりに静かである。二つの時計——その一つは小形の置き時計で、右側の壁にくっつけた戸棚とだなの上にある、もう一つは懐中時計でベットの頭の手すりにつるしてある——この二つの時計の秒を刻む音と、足もとのほうから聞こえて来る付添看護婦の静かな寝息のほかには何もない。ただあまりに静かな時に自分の頭の中に聞こえる不思議な雑音や、枕まくらに押しつけた耳に響く律動的なザツクザツクと物をきざむような脈管

の血液の音が、注意すればするほど異常に大きく強く響いてくる。しかしそれはじきに忘れてしまつて世界はもとの悠久ゆうきゆうな静寂に帰る。ところが五時ごろになると奇妙な音が聞こえだす。まず病室の長い廊下のはるかに遠いかなたで時々カチャンと物を取り落としたような音がする、それから軽くパタ／＼とたとえば草履ぞうりで廊下を歩くような音も聞こえる。これらのかすかな、しかし原因のわからない、なんだかこの世のあらゆる現実の物音とは比較のできないような雑音が不規則な間隔を置いて響いて来る。それが天井の高い、長い廊下に反響して

なんとなく空虚なしかも重々しい音色に聞こえるのである。しばらく止まっているかと思うとまた始まる。そして今度は前に聞こえたとは少し違った見当に、しかも前よりはだいぶ近い所で聞こえだす。近よるに従ってこの音は前のような不思議な性質を失って、もっと平凡な現実的な音色に変わって来る。それはちょうど鉄鎚てつづいで鉄管の端を縦にたたくような音である。不意に自分のベットの足もとのほうでチヨロくくくと水のわき出すような音がしばらくつづいて、またぱったりやむ。鉄管をたたくような音がだんだん近くなって来ると、今度は隣室と

の境の壁の下かと思う所で、強くせわしなくガチンガチンと鳴りだす。たとえばそれは小さいしかし恐ろしい猛獣がやけに檻おりにぶつつかるかと思うような音である。すると今まで鈍い眠りに包まれていた病室が急に生き生きした活気を帯びて来る。さらにこの活気に柔らかみを添えるのは、鉄をたたく音の中に交じってザブ／＼ザブ／＼と水のおふれ出すような音と、噴気孔から蒸気の吹き出すような、もちろんかすかであるが底に強い力と熱とのこもった音が始まる。このようにいろいろの騒がしい音はしばらくすると止まって、それが次の室に移

り行くころには、足もとの壁に立っている蒸気暖房器の幾重にも折れ曲がった管の中をかすかにかすかにささやいて通る蒸気の音ばかりが快い暖まりを室内にみなぎらせる。すると今まで針のように鋭くなっていた自分の神経は次第に柔らいで、名状のできない穏やかな伸びやかな心持ちが全身に行き渡る。始めて快いあくびが二つ三つつづけて出る。ちようどそのころに枕まくらもとのガラス窓——むやみに丈たけの高い、そして残忍に冷たい白の窓掛けをたれた窓の外で、キュル、キュルくくくと、糸車を繰るような濁ったしかし鋭い声が聞こえだす。たぶん

それは雀^{すずめ}らしい。いつたいこの寒い夜中をどんな所に
どうして寝ていたのであろうか。今一夜の長い冷たい眠
りからさめて、新しい日のようやく明けるのを心から歓
喜するような声である。始めの一声二声はまだ充分に眠
りのさめきらぬらしい口ごもったような声であるが、や
がてきわめて明瞭^{めいりよう}な晴れやかなさえずりに変わる。窓
の外はまだまっ暗であるが「もう夜が明けるのだな」と
いう事が非常に明確な実感となつて自分の頭に流れ込
む。重苦しい夜の圧迫が今ようやく除かれるのだという
気がすると同時にこわばって寝苦しかった肉体の端から

端までが急に柔らかく快くなる。しばらく途絶えていた鳥の声^{いなか}がまた聞こえる。するとどういものか子供の時分の田舎の光景^{いなか}がありあり目の前に浮かんで来る。土蔵の横にある大きな柿^{かき}の木の太枝小枝がまっさおな南国の空^{いろ}いっぱい^いに広がっている。すぐ裏の冬田一面には黄金^{こがね}色の日光^{いろ}がみなぎりわたっている。そうかと思うと、村はずれのうすら寒い竹やぶの曲がり角^{かど}を鳥刺^{ざお}し竿^{ざお}をもつた子供が二三人そろそろ歩いて行く。こんな幻像を夢うつつの界^{さかい}に繰り返しながらいつのまにかウトウト眠つてしまう。看護婦がそろそろ起き出して室内^{そうじ}を掃除する

騒がしい音などは全く気にならないで、いい気持ちに寝ついてしまうのである。

このような朝をいくつとなく繰り返した。しかし朝の五時ごろにいつでも遠い廊下のかなたで聞こえる不思議な音ははたして人の足音や扉とびらの音であるか、それとも蒸気が遠いボイラーからだんだんに寄せて来る時の雑音であるか、とうとう確かめる事ができないうで退院してしまつた。今でもあの音を思い出すとなんとなく一種の——神秘的というのはあまり大げさかもしれぬが、しかしやはり一種の神秘的な感じがする。なぜそんな気がす

るのかわからない。遠い所から来る音波が廊下の壁や床や天井からなんべんとなく反射される間に波の形を変えて、元来は平凡な音があらゆる現実の手近な音とはちがった音色に変化し、そのためにあのような不可思議な感じを起こさせるのか、あるいは熱い蒸気が外気の寒冷と戦いながら、徐々にしかし確実に鉄管を伝わって近寄って来るのが、なんだか「運命」の迫って来る恐ろしさと同じように、何かしら避くべからざるものの前兆として自分の心に不思議な気味のわるい影を投げるのか、考えてもやっぱりわからない。

これとはなんの関係もない事だが、自分の病気の経過を考えてみるとなんだか似よった点がないでもない。気味のわるい、不安な、しかし不確かな前兆が長くつづいている間にだんだんに何物かが近よって来る。それが突然破裂すると危険はもう身に迫っている。しかし危険が現実になればもう少しも気味のわるい恐ろしさはない。

病院の蒸気ストーブは数時間たつとだんだんに冷えて来る。冷えきったころにはまた前のような音がして再び送られて来る蒸気で暖められる。しかし昼間は、あの遠い所でする妙な音はいろいろな周囲の雑音に消されてし

まうのか、ただすぐ自分の室のすみでガチャンガチャンと鳴るきわめて平凡で騒々しい、いくらか滑稽味こっけいみさえ帯びた音だけが聞こえる。夜明け前の寂寥せきぼくを破るあの不思議な音と同じものだとはどうしても思われない。

自分の病氣と蒸氣ストーブはなんの関係もないが、しかし自分の病氣もなんだか同じような順序で前兆、破裂、静穏とこの三つの相を週期的に繰り返しているような気がする。少なくとも、これでもう二度は繰り返した。いちばんいやなのはこの「前兆」の長い不安な間隔である。

「破裂」の時は絶頂で、最も恐ろしい時であると同時に

また、適当な言葉がないからしいて言えば、それは最も美しい絶頂である。不安の圧迫がとれて貴重な静穏に移る瞬間である。あらゆる暗黒の影が天地を離れて万象が一度に美しい光に照らされると共に、長く望んで得られなかつた静穏の天国が来るのである。たとえこの静穏がもしや「死」の静穏であつても、あるいはむしろそうであつたらこの美しさは数倍も、もつともつと美しいものではあるまいか。

(大正九年三月、 渋柿)

日本文学電子図書館

「寺田寅彦随筆集 第1巻」

著者：寺田寅彦

制作者：宮澤一郎

出版社：岩波文庫、岩波書店

昭和45年8月20日 第38刷発行



日本文学電子図書館